

アンダーグラウンド

岡嶋
晴香

「本当なのかな？」

「なにが？」

ヒロが間髪入れずに疑問符を投げかけた。どうやら幼馴染の突拍子もない発言には、慣れきっているようだ。かく言う僕も、そう返されるのはわかりきって話しているけれど。

「僕らの足元に、僕らよりうんと前にあつた文明が眠っていること」

歩きながらトントンと地面を蹴つても、なんの音も響かない。つるつるの床が黙って伸びているだけ。なんだかつまらなくなつて、眉をしかめた。

「ちえ……文明開化の音は鳴るくせに、退化した文明の音は鳴らないってか」

「多分、文明開化の音が鳴るってそういう意味じゃないけどな」

「そういう意味じゃないよ」

「知ってる」

ヒロはどうでもよさそうに、短く切り捨てた。それもまたつまらない。

ゆうやけこやけの曲がスピーカーから流れる。そろそろ夜時間だ。曲に合わせて徐々に空が、青色から赤と紫の中間の色に変わっていく。

僕はそれをぼんやり眺めた。

「ヒロはどう思うのさ」

「なにが？」

「……僕の話、聞いてた？」

「文明開化の話？」

「違う」

「嘘だよ、足元に過去の文明が眠ってるかって話だろ」

「そう」

幾分か僕の声の機嫌が戻る。まあそこまで感情の起伏が伝わりやすい声質していないけれど。むしろわかりにくいとすら言われる。穏やかな声らしいから良いけれど。

ヒロは黙ったまま歩き続ける。僕には視線もくれない。変わらない歩調で真っ直ぐ前ばかりを見つめるその姿勢に、僕は今ヒロに問いかけたのか疑い始めた頃。

「あるよ」

僕は変わり者だと言われるが、ヒロも相当だ。僕の幼馴染だからだ。複雑である。

「どうでも良さそうだなあ」

「そういうわけじゃない」

「わかりにくい」

「なにが？」

「……お前、そんな会話プログラムだったっけ？」

「冗談」

「僕より感情読み取りにくいのがわかってる？」

ヒロはくすりと笑わずに前を進み続ける。けれど僕には、少し楽しそうなのがわかった。これも僕がヒロの幼馴染だからだ。僕だからだ。

「こんなに綺麗に舗装された足元に、昔の文明が眠ってるって言われても信じられないよね」

「教科書に書いてある」

「そうだけど、そうじゃないよ」

「なにが？」

「お前、僕よりポンコツっぽい」

「失礼だな」

「ふふ、僕よりポンコツ……」

わざと地面を強く蹴って歩いてみる。この下には、いつかの誰かの文明が眠っている。

「文明は必ず滅ぶ……だから新しい文明ができる。だよな？」

「ああ、そうして人類は文明を進化させ続けてきた。滅んだ文明を埋めて、その上に滅んだ文明の技術を用いて新しい文明を作る」

「それじゃあこの下には、本当に太古の文明たちが……」

「ある」

「信じられないなあ」

「教科書に載ってる」

「そういう話じゃないよ」

僕は少し頬を膨らませて足元を見た。ヒロに友達ができない理由がわかる。僕がいなければヒロはぼっちだ。そう、ぼっち。昔の言葉だ。確かに僕の中には昔の記録がある。足元に昔の文明があるのは信じられないけれど。

ヒロが前を向いたまま、口を開いた。

「空が近くなったんだ」

「空が」

「どんどん地上の上に文明を立てて、埋めて、また文明を立てて」

「それで、空が近くなっちゃった？」

「空気が薄いからな、各区画ごとに天幕を貼ることになってるんだ」

「酸素供給の為だっけ？」

「そして、そこに空を映し出してる」

「それも教科書？」

「そう」

「ふうん……あつ」

珍しく見知らぬ誰かが歩いてくる。僕は愛宕笑いを浮かべながら、少し歩く速度を上げてヒロの真横に並び、会釈をした。見知らぬ誰かの隣にいた付き添いもまた、微笑みながら会釈をした。僕と付き添いがすれ違つ。道が広くないから、少し服が掠った。

ヒロは相変わらず前を向いたままだ。会釈もしない。そして付き添いの隣にいる見知らぬ誰かも前を向いたままだ。微笑みもしない。でもそういうものなのだ。今の文明はそういうものなのだ。

「時代が変わったってことだよね」

「何、急に」

「感傷にふけるってやつだよ」

「そう」

「今のは本当にどうでもいい時の声だね」

「別に」

僕だからわかるのだ。ヒロの幼馴染だから。

僕の足元には真っ白な道が伸びている。汚れも傷もない、真っ直ぐ、ただひたすら真っ直ぐ。その脇には四角い大きな箱がいくつも並んでいる。誰かのおうちだ。どこまでも続く白い道に、どこまでも立ち並ぶ誰かのおうち。なぜ人類は真っ直ぐが好きなのだろう？

「じゃあこの下には、僕達はいるのかな？」

「人間？」

「……それは、いないと思う。さすがに」

「俺もそう思う」

「そうじゃなくて、ロボットとか」とかアンドロイドとか」

「まあ、いるんじゃないか？」

「……そっか」

なんだか微妙な気持ちだ。

空が完全に紫色になったから、あと三十分で夜の時間だ。真上に三日月が映し出されている。ということは、明日の天気は晴れの後曇りらしい。

「明後日は雨が降るのかな」

「明日の月を見ないとな」

「下弦の月が出ませんように……」

「雨は嫌いなのか？」

「ヒロ好きなの？」

「別に」

まあだろうな、と僕は黙った。

雨の日の教室は最悪だ。学校に着いたらみんな、まずは自分のアンドロイドが故障しないか様子を見る。慌ただしいのだ。そしてハラハラしている。その空気で僕もハラハラする、どうすることも出来ないのに。どうしても機械は水に弱い。

「なんで文明を埋めちゃうんだろう」

「滅んだ文明を一旦壊して整えるより、上からプレートを被せて新しく文明を作る方が効率がいいから」

「ヒロ、教科書丸暗記？」

「当たり前だ」

「そういうプログラム？」

「冗談」

「わかりにくい」

「全部は覚えきれないよ、お前と違って俺は人間だからな」

「そっか」

僕は首をかたむけながら応える。ヒロは僕が納得してないのをわかってるらしい。少し肩を竦めた。僕だか

らわかるのだ。ヒロの幼馴染だから。ヒロのアンドロイドだから。

「でもヒロ、時々僕よりアンドロイドらしいよ」

「お前が人間らしく設計されているからだろ」

「そういう意味じゃないよ」

「そう」

興味がなさそう。僕には一瞥もくれない。まっすぐ前を向いたまま。

「そういうところとか」

「人間みんなそんなもんだろ」

「……確かに」

「他人なんて何考えてるのかわからない。それこそ肉親ですらな」

「だから、みんな産まれたら直ぐに自分のおうちが支給されるんだよね」

「それと、世話係兼護衛のアンドロイド」

「僕だね」

ヒロが不意に黙り込んだ。視線が僅かに下がり、歩調が緩やかになる。

「……今や、アンドロイドの方が感情豊かだ」

「そうかな？」

僕は努めて明るい声を出した。これは落ち込んでる時の声だ。励まさなければならぬ。

「そんなことないと思うけど」

「いいよ、そういうプログラムは」

「そうは言われても、そういう設計だから」

「……そう」

そう呟くとヒロは完全に黙り込んだ。どんどん遅くなる足も、とうとう動きを止める。到着時間の予測が、三分遅れた。だが夜の時間前には家に着けそう。問題なし、と判断した僕は、ヒロに合わせて立ち止まる。

ヒロは黙って空を見上げていた。紫色の空が、少しずつ黒ずんでくる。あと二十二分で夜の時間だ。

「俺たち人間は、なんなんだろうな」

寂しげにヒロは呟いた。

「どういふこと？」

文法に欠如が見られる。僕の言語プログラムでは上手く処理できなかった。ヒロは時々難しい文法の欠如を

行う。僕はそれに対して学習していたが、その結果他のアンドロイドたちからは変わり者とえられるようになってしまった。僕がヒロの幼馴染だからだ。少し複雑だ。

「他者を信じることも出来ないまま、生まれた時に与えられたアンドロイドのみに依存して、誰とも関わらずに生きる人間って、幸せなのか？」

「だから僕は言ってるじゃない。友達を作りなよって」

「いつもそれ言ってるよな。ともだちって何？」

「昔の言葉だよ。赤の他人同士が、共通の趣味や価値観をもとに思いを通わせて親しくなること」

「そんなの無理だ」

「無理じゃないよ」

「他人とすれ違うあの瞬間でさえ、俺たち人間は恐怖を抱くのに？」

「そりゃ犯罪防止からすれば、僕達アンドロイドが護衛として、マスターと他者の壁になるのも正しい防止法だけど……」

ヒロは変わっている。そもそも人類は、そんなこと考えないのに。幸せなんてものも、寂しさなんてものも考えないのに。だからこそ僕たちが感情豊かに作られているのに。ヒロは変わっている。そして、可哀想だ。

「昔は、すれ違いざまに見知らぬ誰かを刺し殺すような事件だって多くあったらしい」

「そうだけど……友達って、素敵らしいんだよ」

「……やっぱお前変わってるよ」

「ヒロの幼馴染だからね」

「さすが俺のアンドロイドだ」

「へへ、ありがとう」

「皮肉だぞ」

わかってても、ヒロに褒めてもらえるのは嬉しい。そうプログラムされているからかな。

ヒロはまたつまらなそうな、人類がみんないつも浮かべてる表情に戻って、歩き始めた。まっすぐ前を向いたまま。

「ヒロ、あと七分今の速度で歩いたら家だよ」

「ああ」

「ヒロは感情豊かだよ」

「そう」

「どうでも良さそうだなあ」

「別に」

それっきり、僕とヒロは黙って歩き続けた。今は話しかけない方がいい。表情は変わらないけれど、僕はわかる。ヒロの幼馴染だからだ。

僕らが歩く足元には綺麗な道しかないけれど、教科書によれば、昔の文明が埋まっているらしい。文明は何度も滅びる。平均的には、二百八十三年に一度、滅びる。そして滅んだ文明の上に、擬似プレートに乗せて偽物の地上を作る。そしてまた新しい文明ができるのだ。

僕らの足元には、かつての文明が眠っている。起きることはきつとないし、僕らの今見ているこの景色もあと百四年後にはプレートの下だ。そしてそのプレートの上で、僕らの文明の知識を持った、僕らよりもグレードアップしたアンドロイドが人々の隣に居るのだろう。

その時、人類はどうグレードアップしているのだろう。

できればどうかヒロのような思いをする人はいないといいなあと思いつながら、僕はこの思いごと僕自身が埋められるのをそつと悲しく思った。